

英語における群前置詞に関する諸論の検討

藤田 郁

Abstract

Since Sweet (1891) proposed the term and definition of “group prepositions,” it has been a controversial topic among researchers. Regarding high school English teaching in Japan, the phrase “group preposition” is more popular than the following phrases: in front of, in spite of, according to, because of, etc. However, when examining books on English grammar or research papers about group prepositions, even advanced learners have found that the many varied opinions on this topic have led to much confusion for both students and teachers and possibly researchers too. This is the case not only in Japan but also all places where English is studied. Asking “what exactly does the term ‘group prepositions’ mean?”, the various definitions by which it has been referred to will be discussed and clarified in this paper.

キーワード：群前置詞，複合前置詞，学習英文法

1. はじめに

「前置詞＋名詞＋前置詞 PREP1＋NP 1＋PREP2（以下同様に表記）」や「前置詞＋名詞 PREP＋NP」等，前置詞を伴う２語以上の語が前置詞の働きをする（とみなされている）ものや前置詞が含まれている語群（前置詞句）等は，群前置詞（Group Prepositions）や複合前置詞（Compound Prepositions / Complex Prepositions）等と呼ばれることがある。しかしその分類方法は研究者によって意見が分かれており，また呼称も複数存在する。この呼称の相違については後に触れるが，本稿を進めるに当たっては，先の研究者の特定の呼称を紹介する以外では，便宜上「群前置詞」と呼ぶ。群前置詞の分類方法，呼称，取り扱いが研究者によって異なる中で，高校生向けの英語参考書での扱われ方はほぼ一貫しており，筆者が本稿で取り扱っている書籍を参照した限りでは，研究者の意見が分かれている部分を掲載していない。しかしさらに発展した内容を学ぼうとする学習者が目にする英文法書や，研究論文では異なる論が記述されており，学習者が混乱する要因になりうるのではないかと筆者は危惧している。

本稿では，日本で刊行されている高校生向け英文法学習書での取り扱いを概観した上で，先行文献では群前置詞をどのように分類・定義づけ，取り扱っているのかを比較検討し，これまでどのような呼称や定義，分析が施されてきているかを示したい。

2. 先行文献

本節では、群前置詞に関する先になされてきた学術的研究及びそれらの研究に付随した英文法書、及び高校生向けの英語参考書を先行文献として分類し、検討していく。

2.1 高校生向け学習英文法書

以下に、高校生向けの英語参考書において扱われている群前置詞の箇所を引用する。なお、各群前置詞の直後に記述されている日本語訳 (e.g. according to (～によれば)) や、群前置詞直後の波ダッシュ (e.g. according to ~) は省略し、適宜改行を編集したものを引用する。

2語以上の語のまとまりが、1つの前置詞と同じ働きをすることがある。これを群前置詞という。

① 2語からなる群前置詞

according to, apart from, as for, as to, because of, but for, due to, instead of, owing to, thanks to, up to, with all

② 3語以上からなる群前置詞

as far as, at the risk of, by means of, by way of, for fear of, for the sake of, in addition to, in case of, in front of, in spite of, on account of, on behalf of, with regard to など

(『Forest』第6版、第7版: pp. 618)

2語以上の単語が集まって1つの前置詞の働きをするものを群前置詞という。

▶ according to の用法

モデル文 (1) の according to ~ は「～によれば」という意味を表す群前置詞である。
(中略)

▶ instead of の用法

Instead of ~ は「～の代わりに」という意味を表す群前置詞である。
(中略)

よく使われている群前置詞は以下の通り。

• 2語からなる群前置詞

as for, as to, aside [apart] from, because of, for [with] all, owing to, thanks to, up to

• 3語以上からなる群前置詞

at the cost of, at the risk of, by means of, by way of, for the sake of, in case of, in favor of, in spite of, in terms of, in the face of, in (the) light of, in token of, in view of, on account of, with regard [respect] to

(『ジーニアス総合英語』: pp. 525-526)

また、『ロイヤル英文法』、『クラウン総合英語』第3版、『Engage』においてもほぼ同様の内容で掲載されている。

2.2 群前置詞に関する先行文献

以下に群前置詞に関する先行文献を、群前置詞として扱う範囲の広さを基に2つに大別し、その範囲が狭く、NP1に冠詞が入ることをほとんど許さないものを「群前置詞I」, 「群前置詞II」に比べ範囲が拡大しており、NP1に冠詞を含むものが多いものを「群前置詞II」, そのどちらにも属さない、あるいは区別すべきと筆者が考えるものを「その他」とし、3つに分け記述する。

2.2.1 群前置詞I

群前置詞 (group-preposition (s)) という用語は、Sweet (1891) によるものであると、『新英語学辞典』(pp. 526) に記されている。Sweet は、群前置詞を以下のように定義している。

... consisting of a noun governed by a preceding preposition and followed by another preposition, which grammatically governs the following noun, although logically the noun is governed by the whole group.

(Sweet (1891: 134))

具体例として *by means of*, *for the sake of*, *with regard to* を挙げており、*for the sake of* のように、NP1に定冠詞 *the* が入るものも一部許容しているが、同時に許容の範囲を限定もしていない。これらの群前置詞のまとまりは以下のように表すことができると考える。加えて、“The group-preposition *because of* contains only one distinct independent preposition, but the *be-* is really a weakening of the preposition *by*.” (Sweet 1891: 135) とし、*because of* を群前置詞に加えながらも、上述の群前置詞とは異なると指摘している。つまり、Sweet における群前置詞とは、PREP1 + NP1 + PREP2 の形に限られるということになる。

斎藤 (1964) は、群前置詞という用語ではなく、成句前置詞 (Phrase Preposition) という用語を用いている。例に挙げている群前置詞は、*Instead of*, *in spite of*, *on account of*, *in front of*, *on behalf of*, *because of*, *by means of*, *with regard to*, *in respect of* であり、およそ Sweet (1891) の例と同様であるが、PREP1+NP1+PREP2 (+NP) の形の唯一の例外とされた *because of* に加えて *instead of* も挙げられており、また、PREP2 にくる “of” 及び “to” が省略される場合をそれぞれ以下のように記述している。

“Of” の略される場合：—*On this side* the grave, (比較：—*On the other side of* the river);
(中略)

“To” が略されているもの：—*Near*:— The house is near the school.
Next:—He sat next me.

(斎藤 (1964: 5) より一部抜粋)

つまり、基本の形としては PREP1 + NP1 + PREP2 を成句前置詞 [= 群前置詞] と呼ぶが、省略された場合に限り、PREP + NP を許容している。また、他の研究や学習英文法書等で群前置詞に含んでいる *according to* などは動詞前置詞 (Verbal Preposition) の意味上の主語 (Sense-Subject)

のない例として以下のように記述しており、群前置詞には含んでいない。(斎藤 (1964: 4))

小西 (1976: 12) は、日本語表記では「群前置詞」、英語表記では“Group preposition”として取り上げている。小西 (1976: 12) による群前置詞の定義は、「in (or by, at, on, etc.) + 名詞 + of (or to, with, for, etc.)」であり、その働きを以下のように説明している。「前置詞+名詞+前置詞」の全体が次に来る目的格を支配する場合で群前置詞の中核を占めている。これは、たとえば、brush up / brush up on 等の句動詞 (Phrasal verb) に対応するもので、動詞句がそうであるように、範囲が問題である」(小西 (1976: 13)) 例に挙げているのは“in spite of, in view of, by way of, by means of, on account of, on top of, in addition to, in return for, with (or in) regard to, etc.”であり、PREP1 + NP1 + PREP2 以外では、ADJ/ADV/CONJ + of (or to, etc.) の例として“alongside (of), back of [米口語], but for, owing to”等を、ADV + PREP の例として“along with, ahead of, over against, up at”等、その他の例には“as for, as to, face to face with”等を挙げている(小西 (1976: 12-13))。また、「前置詞というものの性格を考えると、(中略)(潜在的に) 1 個の前置詞に還元できるようなもののみに限るのがよいのではないかと思う」と述べ、本稿でも後に挙げる Curme (1931) が提示する“from behind, in between, out in front of”等について「これは前置詞句を目的語にとる前置詞と考える方が適当であろう」(小西 (1976: 12)) と群前置詞の適用範囲に対する意見を述べている。

加えて Declerk (1991: 43) は、以下のように述べ、具体的な呼称を使用せず、“complex prepositions”と呼ばれていることを紹介するに留めている。“Some prepositions are not single words but combinations of words (sometimes called complex prepositions).” Declerk (1991) が該当項において例挙しているのは以下であり、必ずしも PREP1 + NP1 + PREP2 (+NP2) の形のものを群前置詞としているのではなく、ADV + PREP の形のものも群前置詞として挙げている点、および冠詞のついている語群は基本的に含んでいない点から、小西 (1976) の扱っている群前置詞の範囲と近いと考える。以下引用例における下線部分が、小西 (1976) と共通する群前置詞である。また、群前置詞という用語は用いていないものの、本稿で群前置詞と呼んでいる語のまとまりと同様のものと考えて差し支えないであろう。“Instead of, ahead of, together with, apart from, next to, aside of, in spite of, in front of, in addition to, by way of, in case of, with respect to, on behalf of, etc.” (Declerk (1991: 43)) (下線筆者)

ここまでの先行研究を見て言えることは、for the sake of を除いて NP1 のほとんどに冠詞をつけていないことである。また、Sweet (1891) では群前置詞を PREP1 + NP1 + PREP2 の 3 語以上からなる句と、やや性質を異にするものの because of を含めた範囲にて定義しており、また斎藤 (1964) の定義する群前置詞も Sweet (1891) に準じている。小西 (1976) 及び Declerk (1991) が定義している群前置詞は Sweet (1891) 等よりも若干範囲が広がり、必ずしも PREP1 + NP1 + PREP2 の形だけではなく、副詞や形容詞と前置詞が組み合わされて 2 語からなるものも群前置詞に含めている。

2.2.2 群前置詞 II

Curme (1931) が群前置詞とする範囲は、上記の研究と比較すると広がっている。Curme (1931: 562-566) において、群前置詞はアルファベット順に詳細に列挙されているが、数が膨大である

ため一部抜粋にとどめ、筆者が分類したものを以下に例示する。

a. 2語からなる群前置詞

according to, agreeably to, apart from, as for, due to, east of, because of, back of, face to face with, from above, care of, from off, concurrently with, conditionally on, differently from, next to, with in etc.

b. 3語 (以上) からなる群前置詞

as compared with, as far as, for fear of, for lack of, by means of, by order of, from lack of, hand in hand with, in accordance with, in addition to, in case of, in conflict with, in front of, next room to, with in reach of, in agreement with etc.

c. NP1 に冠詞を含む群前置詞

at the cost of down to, at the hands of, at the point of, to the east of, at the risk of, for the benefit of, in the room (or place) of, in the teeth of, with a view to, with an eye to, with the purpose of, with the exception of etc.

他の論と比較して興味深い点は、特に冠詞を含む群前置詞の多様性である。PREP1 の直後に来る N に冠詞をつけたものを群前置詞とみなすことにより、その群前置詞の範囲はこれまでの論と比較して飛躍的に広がっているといえることができる。

Poutsma (1926) と Palmer and Blandford (1969) は、上の Curme (1931) と同様に群前置詞の範囲を広く設定している。Poutsma (1926: 719) は "Group-prepositions whose most significant part is a noun." としながらも、群前置詞を以下のように定義している。"Such as are made up of a noun preceded by a primary preposition, mostly at, by, in or on, and followed by a primary preposition, mostly of or to, both prepositions being greatly weakened in meaning, or conveying no meaning at all (103)." (Poutsma (1926: 716)) また、副詞等を伴う群前置詞についても以下のように言及している。

...such as consist of an adjective or an adverb with a primary preposition, mostly *of* OR *to*, which in some phrases is apt to be suppressed. (...) A separate group is formed by such phrases as contain the name of one of the points of the compass, e.g.: (*to the*) *east of*, (*to the*) *eastward* (*s*) of, etc. Such as consist of a primary adverb and a primary preposition, belonging, strictly, to different elements of the sentence, but so closely connected as to form a kind of unit.

(Poutsma (1926: 717-718))

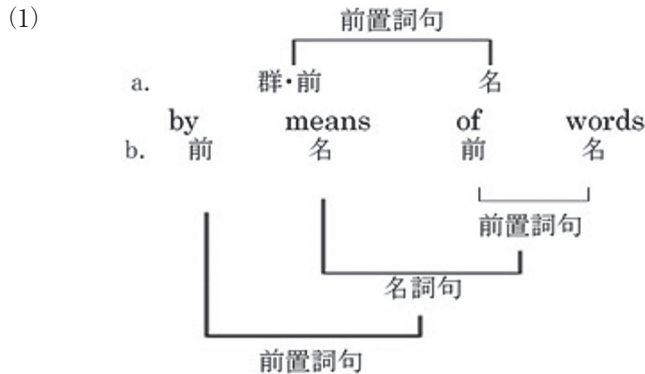
Palmer and Blandford (1969: 289) は、 "...may be Simple prepositions, consisting of a single word, or Group preposition, consisting of more than one word." とし、冠詞を含む群前置詞に *at the corner of*, *at the said of*, *at the end of*, *at the beginning of*, *at the time of* など例として挙げている。

成田他 (1984) はこれまでに見た Curme (1931), Palmer and Blandford (1969), Poutsma (1926) による群前置詞の分類を総括した内容となっている。成田他 (1984: 15-18) は、複合前置詞 (compound preposition) と群前置詞 (group preposition) を区別して用語を用いているが、以下の引用からも分かる通り、群前置詞の他にも「句前置詞 (phrasal preposition)」の呼称を示している。

英語の前置詞には、二語以上から成る群前置詞または句前置詞 (phrasal preposition) と呼ばれるものが相当数ある。群前置詞は、慣用性が高く、その構成要素はほとんど入れ替えができない。その意味も、個々の構成要素の意味の総和として理解することができない場合が多い。

(成田他 (1984: 18)) (下線筆者)

この説明は、群前置詞がどのようなものであるかを理解するには分かり易い説明であるように感じられるが、成田他の言う上記下線部、「構成要素はほとんど入れ替えができない。」という点には疑問が残る。成田他 (1984) の挙げる群前置詞の例を取り上げる前に、群前置詞をどのように捉えているか分かり良い図を成田他 (1984: 21) より引用する。



成田他は、列挙した群前置詞の例に対して、「群前置詞として扱わなければならないという理由はない。」と断りつつも、“We express our thoughts by means of words.” 「という場合の by means of words の部分は、次 [= 上記 (1)] の (25) a. [= (1) a.] の分析の方が、b. の場合に比べて自然」であり、「by means of というような語群の結合の固さ、つまり慣用性の高さを示していると考えられる。これに比べると、in the absence of などの場合は、やや緩い結合になっていると感じられる。」と述べており、この「やや緩い結合」がどの程度まで、あるいはどのように許容され、群前置詞とするのかの基準が曖昧である。また、「前 (+冠) + 名 + 前」型の第一前置詞として用いられるものは in が最も多く、第二前置詞は of が圧倒的に多い。群動詞の構成要素としても of と in の使用頻度が高いのである。」(成田他 (1984: 21)) とも書いていることは、以下に引用する例からも明らかである。しかし、この構成要素として多い of と in に挟まれる NP1 若しくは PREP2 の後ろにくる NP2 に何かしら制約はあるかもしれないものの、様々な名

詞を使うことが出来る。これは、「構成要素の入れ替え」には当たらないのか疑問である。以下、成田他 (1984: 19-21) による群前置詞例を一部抜粋する。

「前 + 名 + 前」:

- 1) in accord with, in alliance with, in charge of, in comparison with, in defiance of, in exchange for, in fear of, in honor of, in line with, in memory of, in obedience to, in proportion to, in pursuit of, in quest of, in recognition of, in response to, in virtue of
- 2) by dint of, by means of, by reason of, by right of, by virtue of, by way of
- 3) with reference to, with regard to, without regard to, with respect to
- 4) on account of, on behalf of, on top of
- 5) for fear of

「前 + 冠 + 名 + 前」:

- 1) in the absence of, in the back of, in the case of, in the eye of, in the face of, in the matter of, in the middle of, in the name of, in the presence of, in the proportion of
- 2) at the back of, at the end of, at the expense of, at the mercy of, at the risk of
- 3) on the brink of, on the edge of, on the ground of, on the part of, on the strength of, on the top of, on the verge of
- 4) with a view to, with the aid of, with the exception of
- 5) for the benefit of, for the purpose of, for the sake of
- 6) to the advantage of, to the extent of, to the point of
- 7) as a result of, by the name of, within an ace of

「副 + 前」: According to, across from, ahead of, along with, apart from, as for, as from, away from, instead of, next door to, together with, up to

「形 + 前」: Due to, next to, owing to

その他: after all, because of, but for, except for, for all, on board, on the right [wrong] side of, over and above, save for, thanks to, up and down, with all

江川 (1991) は、群前置詞等の呼称を使用せず、またその性質を説明する文はない。しかし、一部の群前置詞を取り上げ、意味用法の説明を行っている。取り扱っている群前置詞は以下の通りである。

as for, as to, as from, as of, because of, on account of, owing to, due to, for the purpose of, with a view to, in spite of, despite, in addition to, besides, instead of, in place of, except, except for, in terms of, according to, thanks to

(江川 (1991: 432-436) より抜粋)

特別な呼称を使用したり、上記に引用した語群がどのような基準で選択されたか等を説明したりしていないため、江川の群前置詞に対する見解は明らかにすることができない。

その一方で安井 (1996: 210) は『前置詞+名詞+前置詞』や『副詞+前置詞』などの結合は、全体で1個の前置詞として用いられることがあり、群前置詞 (group-preposition) と呼ばれることがある」と述べ、because of, instead of, according to, by means of, in spite of, along with, as for, as to, by way of, in addition to, in case of, up to, on account of を例に挙げる。更に、with a view to を例に挙げ、「代わりに1語の前置詞を用いても同じことが表せる場合には、群前置詞の使用は避けるほうがよいとされる」として with a view to を for に置き換えた方が良いと主張している。このことから、安井 (1996) においては、上に挙げた群前置詞のみではなく、with a view to などのように N1 の前に冠詞のついたもの、さらに言えば定冠詞 the ではなく不定冠詞 a のついた語群も群前置詞として捉えていると考えられる。

Kruisinga (1932: 382) は、群前置詞について以下のように定義している。

...they [= prepositions] maybe word-groups, such as (have been mentioned in the sections of the absence of the article): *in (the) face of, in case of, etc.* (see 1363); also *out of, up to, etc.*, really of the same type as *until, into*, although these are written in one word. The group-prepositions, both those of the type *in case of, etc.* and those consisting of an adverb and a preposition, such as *into, onto, upon, up till, etc.*, always are of the purely prepositional type discussed in 1422.

また、以下の通り PREP2, 特に of が省略される場合を指摘しており、これは先に挙げた斎藤 (1964) と共通する部分と言えよう。

Some of the group-prepositions of the type *in case of* can also be used without a preposition after the noun; thus we find both *on board a steamer, on board of a steamer*. Such a group as *on board* hardly differs from a preposition like *beside*.

(Kruisinga (1932: 383))

これまでの先行研究と異なる点は、以下のようにこれらの群前置詞を名詞的群前置詞と、副詞的群前置詞の2種に更に分割している点である。

The two types of group-prepositions that have been illustrated may be distinguished as nominal (*in case of*) and adverbial (*into, up to*.) A third type are the verbal derivatives in *-ing*. If an *ing* from a verb that is construed with an object is used in an unrelated adjunct, it can often be interpreted as part of an adverb adjunct as well. Some *ings* are so frequently used in this way that they are most naturally looked upon as prepositions; such

are *during, pending, including, notwithstanding*.

(Kruisinga (1932: 383))

Quirk and Mulholland (1964: 64) は, “complex prepositions” という名称を用いて, 群前置詞を説明しており, “P1N1P2 sequences can become fully institutionalized as complex prepositions” かつ “the P1 or N1 or both losing identity (because of, ahead of, instead of), and the P2 in some instances becoming optionally deletable, as in alongside 8of), on board (of).” と指摘している。また, 冠詞ありの群前置詞と, 冠詞のない群前置詞の相違点が曖昧であることを指摘しつつ, 9つの基準を用いて “the sequence both lexically (...) and grammatically” (Quirk and Mulholland (1964: 64)) として双方の視点から群前置詞の分析を試み, 分析の結果, 群前置詞を以下5つの Class 及び7つの Type に分類している。この論文及び分析の結果を総括し簡略化したものが, Quirk et al. (1985: 669) に記載されており, そこでは定冠詞なしの群前置詞と定冠詞ありの群前置詞の相違について, 以下のように結論づけている。

In the strictest definition, a complex preposition is a sequence that is indivisible both in terms of syntax and in terms of meaning. However, there is no absolute distinction between complex prepositions and constructions which can be varied, abbreviated, and extended according to the normal rules of syntax. Rather, there is a scale of ‘cohesiveness’ running from a sequence which behaves in every way like a simple preposition, eg: in spite of (the weather), to one which behaves in every way like a set of grammatically separate units, eg: on the shelf by (the door).

(Quirk et al. (1985: 671)) (下線筆者)

呼称やそれぞれの含める範囲は異なるものの, これまでに挙げた群前置詞 I・II において言えることは, 群前置詞の定義は異なっているものの, その存在は認めているという点である。

2.2.3 その他

これらに対し, Huddleston and Pullum (2002: 620) は “Much modern work in descriptive grammar adopts the complex preposition analysis, thus treating *in front of* as similar to the simple preposition *behind*.” とこれまでの群前置詞に関する研究について言及した上で, 以下のように述べ, 群前置詞と呼ばれているものは “exhibits a high degree of fossilization” と結論づけている。

The close semantic relation between *in front of* and *behind* [...] gives the complex preposition concept some initial intuitive appeal, but semantic relations of this kind do not provide a reliable guide to syntactic analysis.

(Huddleston and Pullum (2002: 620-621))

また, その理由及び証拠として, 以下のようないくつかの群前置詞 (と呼ばれている) 前置詞

句の分析を施し、その一例として他の研究者が in front of をひとまとまりで一つの前置詞と同じ働きをする群前置詞として扱っていることに対し、働きの似ているとされる1語の behind を例に挙げて比較し、in front of が behind と同じ振る舞いできないことを示している。

- | | |
|----------------------------------|------------------------|
| i a. It is behind the car. | b. It is behind. |
| ii b. It is in front of the car. | b. *It is in front of. |

(Huddleston and Pullum (2002: 621))

これまでに挙げた研究を広汎に取り扱いつつ、主として British National Corpus を用いて実際に使われている例文を分析した研究が、Hoffman (2005) である。Hoffman (2005: 30) は、“So far, all of the works mentioned in this overview have treated the class of complex prepositions as a fairly uncontroversial entity.”とこれまで群前置詞に関して様々な論が展開されていることを指摘しつつ、“Although the problem – or rather, impossibility – of defining the exact boundary between complex prepositions and other PNP-constructions is mentioned in many modern grammars, the grammatical class of complex prepositions.”と群前置詞についてまた同じ形をしつつも群前置詞ではない前置詞句構造 (PNP-constructions) の線引きが非常に難しいことを指摘している。Hoffman は群前置詞については “complex prepositions” と Quirk and Mulholland (1964) と同様の呼称を用いており、また “(other) PNP-constructions” という呼称を Hoffman が群前置詞には分類できないとする PREP1 + NP1 + PREP2 (+ NP2) の語群に用いている。上にも示した Huddleston and Pullum (2002) における化石化 (fossilization) であるという説には “Notable exceptions [of arguments about complex prepositions and PNP-constructions; 筆者注]” と言及しているが、Hoffman は自身の分析を通して群前置詞は存在するという立場である。Hoffman は、この群前置詞に関する研究分析に主に British National Corpus を使用しており、共時的・通時的観点から詳細に分析がなされている。通時的研究には The Gutenberg Corpus と The Oxford English Dictionary を使用しており、全体としてイギリス英語に寄った分析結果であると考えられるため、アメリカ英語との比較分析を行うことも有益であると考えられる。

秋元 (2005) は、複合前置詞 (complex preposition) の呼称を用い、「FLOB コーパスを基に、複合前置詞の文法的、談話的機能を考察し、合わせて文法化、イデオム化の観点から、その発達を概観」(秋元 (2005: 16)) している。興味深いのは、2つの第一前置詞 (PREP1/PREP2) に挟まれた名詞 (NP1) の名詞性に関する分析であり、in accordance with, by dint of, in spite of 等において使用されている「名詞は複合前置詞内でしかその存在があまりないことを示して」おり、それらの名詞は「ほとんど前置詞と共に現れ、異形を作っていることが分かる」として示している。しかし、この名詞性の低さがそのまま群前置詞であるかどうかの絶対的指標になるとは言い難く、秋元 (2005: 16) も述べているように更に発展した研究及び分析が必要であると考えられる。

3. まとめ

3.1 英語学における群前置詞の取り扱い

英語学の観点から概観してみると、群前置詞の定義及び呼称や取り扱いは、研究者等によって様々であることが浮き彫りになっている。本稿で取り上げた以外にも群前置詞に関する研究等は多くあり、網羅し切れていないため、更なる追究を施し、比較検討する必要がある。

(2)

	名前	呼称
群前置詞 I	Sweet (1891)	group-preposition (s)
	斎藤 (1964)	Phrase Preposition (成句前置詞)
	小西 (1976)	Group preposition (群前置詞)
	Declerk (1991)	—
群前置詞 II	Curme (1931)	—
	Palmer & Blandford (1969)	Group preposition
	Poutsma (1926)	Group-preposition (s)
	成田他 (1984)	Group preposition / phrasal preposition
	江川 (1991)	—
	安井 (1996)	group-preposition (群前置詞)
	Quirk & Mullholand (1964) Quirk et al. (1985)	complex preposition
その他	Huddleston & Pullum (2002)	— (fossilization)
	Hoffman (2005)	complex preposition
	秋元 (2005)	complex preposition (複合前置詞)

呼称とその定義に絞り、また日本語及び英語の呼称の指すものを合わせて比較してみると、以下のようなになる。

(3)

英語表記	日本語表記	呼称の指すもの・定義
Group (-) preposition (s)	群前置詞	PREP1 + NP1 + PREP2 / ADJ + PREP / ADV + PREP / PREP + PREP etc.
Compound preposition (s)	複合前置詞	PREP1 + NP1 + PREP2 / PREP + N (Historical Usage) = PREP (Modern Usage) e.g. by + cause = because, in + stead = instead etc. / PREP1 + PREP2 = PREP3 e.g. in + to = into, with + out = without etc.
Complex preposition (s)	複合前置詞	PREP1 + N (P) 1 + PREP2
Prepositional	前置詞慣用句	PREP1 + N (P) 1 + PREP2

以上のようにばらつきがあり、あくまで「日本における」呼称ではあるものの、日本語の「複合前置詞」及び英語の“compound preposition (s)”は研究者によって意味するものが異なり、多義的であるため、本稿で取り扱っている群前置詞について述べる際には、使用を控えるべきであると考ええる。“complex preposition (s)”の英語表記自体は他の用語と住み分けがなされているものの、日本語訳となると“compound preposition”との区別がなされておらず、双方とも「複合前置詞」となる可能性が非常に高いため、注意が必要である。

いずれにせよ、呼称が一貫しない主たる原因は、その語の表す意味、すなわちこの「PREP1 + NP1 + PREP2」が何を持っていて（仮に）「群前置詞」と呼ぶのか、という取り扱いおよび定義が固定されていない点であると考ええる。定義が固定されれば、その性質も自ずと明らかになり、どのような呼称を用いるのがより適切かも自然と導き出される可能性があるのではないかと推測する。また、例えばin front ofのように、そもそも1語の前置詞で表すことのできない事象、現象、様態等を群前置詞が補っているだけなのであれば、群前置詞の呼称や範囲基準等もここまで様々な論を招くことはないのではないかと筆者は考える。つまり、1語の前置詞、つまり第一前置詞(primary preposition)で置き換え可能な群前置詞がある程度存在するとして、(またそれらの語群を群前置詞として扱うとして)第一前置詞と群前置詞が使われ始めた時期や語の辿った過程を詳細に分析することもまた群前置詞を定義するのに有益な情報になるのではないかと考える。先に引用した小西(1976)は、「(潜在的に)1個の前置詞に還元できるようなものだけに限るのがよいのではないかと思う」と述べていることから、Curme(1931), Palmer & Blandford(1969), Poutsma(1926), 成田他(1984), そして安井(1996)よりも群前置詞とする範囲を限定していると言いうことができるであろう。

3.2 学習英文法における現在の問題点

学習英文法、とりわけ本稿では高校生向けの英語参考書に焦点を当てたが、高校生向けの英語参考書では取り扱いが統一されているのに対し、研究者の間では呼称、そしてその定義が分かれている。これは、高校生がその参考書を使って英語を学習している間は特に問題がないようにも思われるが、長い目で見ると、「群前置詞」として学習したものに違う呼称が用いられていたり、NP1に定冠詞がつくものが多くその定義に加えられたりすると混乱を招きかねない。混乱を避けるために、「群前置詞」の呼称や定義を直接伝えずにそれらの意味用法を伝えることも可能なのではないかと考える。

4. おわりに

英語における群前置詞に関して、高校生向けの英語参考書には、恐らく一番混乱が起きないであろう呼称を用いて例を挙げている。しかし、研究者の間で呼称はおろか定義が曖昧なままのものを学習者に提示することは、悪いことではないものの、(そして致し方ないこともあるが)学習者が後に混乱する危険性を孕んでいるのではないかと危惧し、現在の問題点を探るべく、本稿では、これまでに示されてきた研究や文献を基にその呼称や定義を比較し、いかに様々な呼称や定義、分析が施されてきているかを示した。

参考文献

- 秋元実晴. 2005.「複合前置詞について」『英語語法文法研究』12:5-18.
- Curme, G.O. 1931. *Syntax. A Grammar of the English Language*. Vol. 3. Boston: Heath.
- Declerk, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusya.
- 江川泰一郎. 1991.『英文法解説—改訂三版—』東京：金子書房.
- Hoffmann, S. 2005. *Grammaticalization and English Complex Prepositions A Corpus-Based Study*. London: Routledge.
- Huddleston, R., and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. New York: Cambridge University Press.
- 石黒昭博. 2009, 2013.『総合英語 Forest』6th ed., 7th ed. 東京：桐原書店.
- Kruisinga, E. 1932. *A Handbook of Present-Day English*. Part II English Accidence and Syntax 2. 5th ed. Groningen: P. Noordhoff.
- 小西友七. 1976.『英語の前置詞』東京：大修館書店
- 中邑光男・山岡憲史・柏野健次. 2017.『ジーニアス総合英語』東京：大修館書店.
- 成田義光・丸谷満男・島田守. 1984.『講座・学校英文法の基礎 第六巻 前置詞・接続詞・関係詞』東京：研究社.
- 大久保晨・松田優. (編) 2015.『英文法・語法 Engage』東京：いっぴな書店.
- 大塚高信・中島文雄. 1987.『新英語学辞典 縮刷版』東京：研究社.
- Palmer, H. E. and F. G. Blandford. 1969. *A Grammar of Spoken English*. Revised and Rewritten by Roger Kingdon Cambridge: W. Heffer & Sons Ltd.
- Poutsma, H. 1926. *A Grammar of Late Modern English*. Part II The Parts of Speech. Section II The Verb and the Particles. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, R., and Mulholland, J. 1964. "Complex Prepositions and Related Sequences". *English Studies* XIV, Supplement. 64-73.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of English*. London: Longman.
- 斎藤秀三郎. 1964.『英文法研究 前置詞用法詳解』東京：吾妻書房.
- 霜崎實. (編) 2016.『クラウン総合英語』3rd ed. 東京：三省堂.
- Sweet, H. 1891. *A New English Grammar: Logical and Historical*. Oxford: Clarendon Press.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘. 2000.『ロイヤル英文法改訂新版』東京：旺文社.
- 安井稔. 1996.『英文法総覧—改訂版—』東京：開拓社.

